児童期における絵本と非言語的コミュニケーション

大森花凛　金谷和香　河田希帆　山川あい（岡山県立大学　子ども学科　2年生）

研究の背景と目的

・COVID-19禍でのマスク着用における表情の見にくさから保育への影響がある。

・読みの速度は実践的研究においてその重要性は繰り返し指摘されている

・保育者が読み聞かせの際に非言語コミュニケーションを取り入れることでみられる、児童の反応の違いを調査することを目的とする

調査方法

◆対象
・放課後児童クラブひまわりの小学１年生５２人

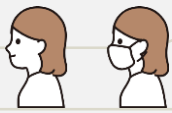
◆方法
・非言語コミュニケーションを取り入れながら読み聞かせを行う１組と、行わない２組に分かれて調査を行う

・読み聞かせ中の子どもの様子を観察し記録をとる

・読み聞かせ後、調査項目について聞き取り調査を行い回答人数と理由を記録する

観察項目を以下の通りとする。
❶子どもの視線
❷子どもの表情
❸子どもの様子

調査項目を以下の通りとする。
①マスク着用の有無
②指さしの有無
③読みの速度
④読み聞かせ者の視線の方向

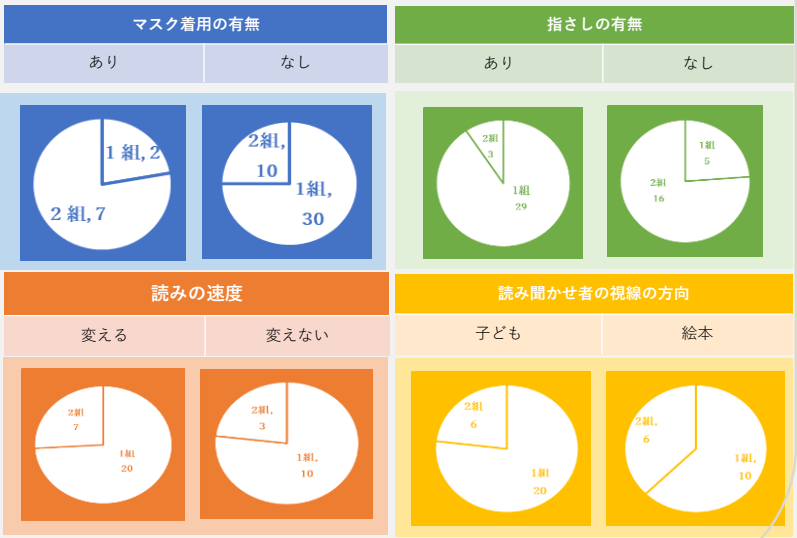


結果

❶子どもは絵本をしっかりと見ていたため、読み聞かせ者と目が合うことがほとんどなかった。カーテンが開いていたので外に視線が向いている子どもがいた。

❷絵本の内容に笑って反応す子どもや口をぽかんと開けて絵本の世界に入り込んでいる子どもがいた。

❸絵本が見やすい位置に座っている子どもは最後まで集中して聞くことができていた。端や後ろの方に座っている子どもはよそ見や手遊びをし始めて、最後まで集中力がもたない。



考察

○絵本に集中できるように環境構成が重要
○端に座っている子にも絵本が見えるように工夫が必要
○手遊びなどの導入を入れることで絵本の始まりから集中しやすい

①マスクの着用の有無は子どもたちの反応には影響がない
⇒声が聞こえれば保育者の表情などはあまり関係がないと考えられる

②指さしの有無は子どもによって反応が様々であった
⇒小さな絵や文字などはすると良いが、あまり頻繁には行わなくて良いと考えられる。

③抑揚がある方が良いと答える子どもの方が多かった
⇒抑揚があることで話に集中しやすいのだと考えられる。

④視線が子どもにある方が良いと答えた子どもの方がやや多かった
⇒視線が子どもにある方が、読みきかせに対する子どもたちの興味関心をひきやすいのだと考えられる。

まとめ

読み聞かせ時における非言語コミュニケーションの取り入れ方は、年齢や発達段階によって変える必要があることが示唆された。今後、それぞれの年齢に合わせた取り入れ方について再検討する必要がある。